



エージェント

# ストックマーク『Aconnect』新機能調査レポート (2025年10月30日発表)

## 1. はじめに

ストックマーク株式会社は2025年10月30日、製造業向けAIエージェント『Aconnect』に新機能「技術探索エージェント」と「特許調査エージェント」を追加したと発表した<sup>1</sup>。これらは従来の情報収集機能を超えて、開発エンジニアが行う技術課題の探索や特許調査といった専門的な調査業務をAIで自動化することを目指している<sup>1</sup>。本レポートではプレスリリースや公式資料、関連論文、第三者記事を基に新機能の概要と価値を詳しく調べ、製造業の研究開発（R&D）・知財部門に与える影響を考察する。さらに、競合サービスとの比較や今後の業界トレンドも分析する。

## 2. ストックマーク株式会社と『Aconnect』概要

### 2.1 ストックマーク株式会社の事業・沿革

ストックマークは2016年創業のAIスタートアップで、「言葉のAIで、人類をよりスピーディーかつ創造的に進化させる」という理念を掲げている。東京・南青山に本社を置き、企業向けに自然言語処理（NLP）技術を活用した製品を提供している<sup>2</sup>。同社は国内外約35,000サイトの日・英・中ニュースや論文・特許、官公庁レポート、社内文書など多様なテキストデータを自動で収集するデータ基盤を保有しており<sup>3</sup>、製造業向けAIエージェント『Aconnect』、全社ナレッジマネジメントを支援する『SAT』、独自の大規模言語モデル（LLM）の開発・提供などを行う。

### 2.2 『Aconnect』の特徴

『Aconnect』は製造業向けに特化したAIエージェントで、研究開発、技術開発、知的財産、新規事業の部門が日常業務で必要とする情報の収集・分析・共有を支援する。主な特徴は以下の通り：

- **情報収集** - 国内外3万5千以上のニュースサイト、学術論文、特許、官公庁レポート、社内資料を自動収集し、関心領域に合った情報をAIがレコメンドする<sup>3</sup><sup>4</sup>。キーワード登録すると新着情報を配信し、スマホアプリでも閲覧可能<sup>5</sup>。数十人規模で作るコミュニティへの共有やコメントが可能で、閲覧数やリアクションも確認できる<sup>6</sup>。
- **技術探索・調査機能** - 研究者が技術課題を入力するとAIが関連分野の論文・ニュースを分析し、要約や課題解決のヒントを提供する。既存の機能にはテンプレートに沿って技術動向を調べる情報探索機能や用途探索機能（β版）などがあり、特許とニュースを組み合わせたIPランドスケープ（特許ポートフォリオや市場動向の俯瞰）も支援する<sup>7</sup>。
- **共有・ナレッジ蓄積** - 社内外の資料を全文検索でき、社内レポートや仕様書の内容まで検索対象とすることでナレッジの属人化を防ぐ<sup>8</sup>。情報へのコメントや「マーク」機能で気づきを共有でき、部門間の議論を活性化する<sup>9</sup>。これによりIPランドスケープや技術企画資料の作成が効率化され、調査で得た洞察を意思決定に反映しやすい<sup>7</sup><sup>10</sup>。

### 3. 新機能の概要と目的

#### 3.1 技術探索エージェント

##### 目的と背景

製造業では研究者が新規材料や製品課題に対する技術探索を行う際、課題を定義して解決策を抽出するまで多くの時間がかかる。プレスリリースによると、技術探索エージェントは技術課題の課題定義・現象分析・アプローチ設計といった複雑なプロセスをAIが自動化し、エンジニアの調査工数を削減するために開発された<sup>1</sup>。従来は情報収集の効率化にとどまっていたが、新機能では研究開発現場で求められる高度な調査業務にも対応する<sup>1</sup>。

##### 主な機能

公式サポート記事では、技術探索エージェントが以下の機能を提供すると説明している：

1. **テンプレート選択** - 製品改善、トラブルシューティング、マーケット主導の発想、規制・環境対応などの目的に応じたテンプレートが用意され、ユーザーは技術課題を自由入力するかテンプレートを選択できる<sup>11</sup>。
2. **課題の分解と仮説提示** - 入力された課題文をAIが分析し、課題を適切な粒度に分解して「仮説」を最大10個生成する。仮説ごとに関連する技術アプローチの方向性を提示し、ロジックツリー型UIで可視化することで見落としを防ぐ<sup>12 13</sup>。
3. **解決策の網羅的提示** - 各仮説に対し最大5件の解決アプローチ（合計50件）を提示し、関連する論文やニュースを最大40件まで出力する<sup>13</sup>。出力結果はCSVでエクスポートでき、文献の概要やURLが含まれるため、R&D部門の議論資料として活用可能<sup>14</sup>。

##### 解決する課題とターゲットユーザー

技術探索エージェントは以下の課題を解決する：

- **課題定義の困難さ** - 従来は課題の粒度や切り口が属人的になり、問題の本質が捉えにくかった。AIが問題を整理し、仮説を提示することで属人性を排除する<sup>12</sup>。
- **アプローチの漏れや偏り** - 発想の範囲が個人の経験に依存し、見落としや偏りが発生していた。ロジックツリーで網羅性を担保することで多角的な解決策を検討できる<sup>12 13</sup>。
- **文献調査の負荷** - 多数の論文やニュースから情報を探す工数が大きい。AIが関連文献を自動収集し、要約を提供するため調査時間を大幅に短縮できる<sup>13</sup>。

ターゲットユーザーは製造業の研究開発部門や技術開発部門のエンジニアであり、新製品開発や既存製品の改善、トラブルシューティング、環境規制対応など幅広い用途が想定されている<sup>12</sup>。アイデア創出に時間を取られがちな研究者が本来の研究活動に集中できるよう支援することが目的である<sup>1</sup>。

#### 3.2 特許調査エージェント

##### 目的と背景

新規開発テーマに関する先行技術や他社特許の把握は研究開発・知財部門の重要な業務だが、膨大な特許データと複雑な技術文書の分析には専門知識と多大な工数が必要である。プレスリリースでは、特許調査エージェントが開発テーマに含まれる構成要素を自然言語から抽出し、関連特許の一致度を自動評価することで技術者の調査負荷を大幅に軽減すると述べている<sup>1</sup>。

## 主な機能

1. **開発テーマ入力と構成要素抽出** – ユーザーが開発予定技術を文で入力すると、AIが製品や技術の要素（構成部品や材料）を自動抽出する。例えば「酸化物半導体トランジスタ」と入力すると、「酸化物」「半導体」「トランジスタ」などのキーワードが抽出される<sup>15</sup>。
2. **特許データのアップロードとスクリーニング** – ユーザーがCSV形式で特許公報をアップロードすると、AIが各特許と開発テーマの要素を照合し、類似度を「高・中・低」に分類して理由を含めたスコアを提示する<sup>16</sup>。JPO・USPTO・WIPOなどの公報フォーマットに対応しており、データはプレビュー機能で確認してから本調査を実行できる<sup>16</sup>。
3. **結果出力とナレッジ共有** – エージェントが作成した特許リストはCSVで出力でき、特許ごとに開発テーマとの要素と一致したか、AIが判断した理由が記載される<sup>16</sup>。エージェントは侵害の判定までは行わないが、関連度の高い特許を発見することで、R&Dや知財部門が詳細調査に集中できるようになる<sup>16</sup>。

## 解決する課題とターゲットユーザー

- **膨大な情報量** – 世界で毎年数百万件の特許が出願され、多くの多言語文献を扱う必要がある中、人手での調査には限界がある<sup>17</sup>。特許調査エージェントはAIが要素抽出とマッチングを行うことで短時間に大量の公報を分析する。
- **専門知識と属人化** – 従来の特許調査は検索式の構築や分類が担当者の経験に依存し、ヒューマンエラーや属人化の問題があった<sup>18</sup>。エージェントは誰でも一定水準の精度を得られるよう設計され、調査結果のばらつきを抑える<sup>19</sup>。
- **見落としリスクと時間** – 膨大な特許データから関連特許を網羅的に抽出するには多大な時間が必要で見落としも発生しやすい<sup>18</sup>。AIは自然言語による入力から関連特許を漏れなく抽出するため、先行技術やクリアランス調査に必要な時間を大幅に短縮できる<sup>16</sup>。

ターゲットユーザーは新技術の先行技術調査や権利化戦略を担当する知的財産部門、R&D部門、特許事務所の弁理士など。開発フェーズで早期に特許リスクを把握し、重複投資や権利侵害を回避したい企業を想定している<sup>16</sup>。

## 4. Aconnect新機能の利用イメージ・データソース

### 4.1 利用するデータソース

ストックマークのデータ基盤は国内外のニュース約35,000サイト、学術論文、特許、官公庁レポート、社内資料など幅広い情報を収集している<sup>3</sup>。技術探索・特許調査エージェントはこのプラットフォームを活用し、複数のデータソースから関連情報を抽出・分析する。

- **論文・ニュース** – 技術探索エージェントは最新の学術論文や業界ニュースから課題解決のヒントを抽出する<sup>13</sup>。論文やニュースには日英中の多言語文献が含まれ、AIが要約して提供する<sup>3</sup><sup>6</sup>。
- **特許公報** – 特許調査エージェントはJPO・USPTO・WIPOなどの公報データをCSVで取り込んで分析する<sup>16</sup>。アップロードした特許文書は自然言語処理により主要構成要素が抽出され、開発テーマとの一致度が評価される<sup>16</sup>。
- **社内文書** – Aconnectは社内の製品企画書・技術報告書・調査レポートを全文検索できる<sup>8</sup>。今後エージェントの出力と社内ナレッジが連携することで、開発過程の議論をより効率化できる。

### 4.2 出力例とユーザーインターフェース

- **ロジックツリーUI** – 技術探索エージェントは課題→仮説→解決策をツリー構造で表示するため、ユーザーは解決方向の抜け漏れを直感的に把握できる<sup>13</sup>。

- ・**CSV出力** – 両エージェントとも結果をCSV形式で出力できる<sup>14</sup><sup>16</sup>。技術探索エージェントのCSVには各仮説と解決策、関連文献の概要やURLが含まれる。特許調査エージェントのCSVには特許番号・タイトル・該当する構成要素・一致理由・スコアが記載され、詳細なレビューが必要な案件を効率的に選別できる。
- ・**メール配信・アプリ通知** – Aconnect全体機能として、ユーザーの関心テーマを登録しておくと朝夕のメールで新着情報が配信される<sup>20</sup>。スマートフォンアプリでも閲覧でき、通勤時間にニュースをチェックし社内コミュニティへ共有する事例が報告されている<sup>6</sup>。

## 5. 製造業における技術探索・特許調査の課題と新機能の価値

### 5.1 従来の技術探索・特許調査の課題

現代の製造業は技術革新が早く、市場投入までの時間を短縮するために研究開発が急がれる。その一方で、以下の課題が存在する：

- ・**情報量の爆発と多言語対応** – 年間数百万件の特許出願があり、多数の論文・ニュースを調べる必要がある<sup>17</sup>。特許調査では日本語以外に英語・中国語など多言語文献の理解が不可欠であり、翻訳の手間が大きい<sup>21</sup>。
- ・**人手不足と専門人材への依存** – 技術動向調査や特許分析には専門知識が必要で、人材採用や育成コストが高い<sup>22</sup>。調査が特定の担当者に依存しがちで引き継ぎが難しい<sup>23</sup>。
- ・**ヒューマンエラーと見落とし** – 人力調査では膨大な文献から情報を拾う作業が手作業となり、見落としや誤判断が発生しやすい<sup>18</sup>。
- ・**調査時間とコスト** – 従来の外部委託調査は数か月と数十万～数百万円単位の費用がかかる<sup>24</sup>。研究者が自ら調査する場合も本来の開発業務を圧迫する。

### 5.2 技術探索エージェントの効果

- ・**課題定義から解決策抽出まで自動化** – AIが課題を分解し仮説を構築するため、研究者は曖昧な問題設定に時間を取られずに済む。複数の解決方向をロジックツリーで提示するため、発想の漏れや偏りを抑制する<sup>12</sup>。
- ・**文献調査の効率化** – エージェントは関係する論文やニュースを自動で抽出・要約し、最大40件の関連文献を提示する<sup>13</sup>。研究者は文献の全件検索や評価の手間から解放され、短時間で重要な情報にアクセスできる。
- ・**属人化の解消** – AIが標準化されたプロセスで仮説と解決策を生成するため、ベテランと新人の間でアウトプットの質が大きく変わらない。これにより企業は技術探索ノウハウを組織的に蓄積できる。  
<sup>12</sup> <sup>13</sup>。

### 5.3 特許調査エージェントの効果

- ・**要素抽出と一致度評価の自動化** – 開発テーマの要素を自動抽出し、膨大な特許リストから類似度を自動評価することで、調査スクリーニングにかかる時間を大幅に削減する<sup>16</sup>。例えば従来数週間かかっていた先行技術調査を数時間に短縮できる可能性がある。
- ・**ヒューマンエラーや属人性の軽減** – AIが一貫した評価基準で類似度を判定するため、担当者によるばらつきや見落としリスクを低減し、若手担当者でも一定レベルのアウトプットが得られる<sup>19</sup>。
- ・**リスクの早期把握と戦略的判断** – 一致度の高い特許を早期に特定することで、重複投資の回避や特許侵害リスクの検討が迅速に行える。また、研究開発や経営陣に対して特許リスクの説明が容易になり、戦略的な意思決定に貢献する。

## 5.4 新機能がもたらすR&D・知財部門へのメリット

- ・**研究開発サイクルの短縮** – 技術探索と特許調査の時間を大幅に短縮し、アイデア創出から検証までのサイクルを加速。プレスリリースでは技術者が大幅な調査工数から解放され、本来注力すべき研究・開発業務に集中できると述べられている<sup>1</sup>。
- ・**イノベーションの加速** – 幅広い分野の文献や特許を横断的に検索・分析できるため、異業種の技術や組み合わせによる新しいアイデアが生まれやすい。AIによる仮説提示が研究者の発想を広げる。
- ・**競合優位性の確保** – 最新の技術動向や競合他社の特許出願状況を迅速に把握できることは、競争優位性の源泉となる<sup>25</sup>。特許調査エージェントは先行技術の早期発見を支援し、クリアランス調査や権利化戦略をより戦略的に行える。
- ・**属人化解消と知識共有** – AIエージェントが標準化された調査プロセスと共有機能を提供することで、個人依存の調査ノウハウを組織知に転換できる。Aconnectのコミュニティ機能やマーク機能により、情報共有が円滑になり部門間連携が強化される<sup>9</sup><sup>26</sup>。

## 6. 競合サービスとの比較

日本国内には特許調査・技術探索を支援するAIツールが多数存在する。本章では主要サービスを機能・技術・価格・ターゲット層の観点から比較する。

| ツール名                       | 主な機能・技術  | 価格帯（目安）                     | ターゲット・特徴  |
|----------------------------|--|-----------------------------|---|
| THE調査力AI                   | 国内外の膨大な特許データを集約し、AIによるノイズ除去と多言語翻訳で精度の高い特許評価を実現 <sup>27</sup> 。分類・保存まで一括で行え、マトリクス表示で社内共有をサポート <sup>28</sup> 。 | 公式資料に価格を掲載。企業規模に応じたカスタムプラン。 | 特許調査に加え社内共有やワークフロー統合を重視する企業。翻訳精度が高く、海外特許調査に強み。                      |
| Patentfield                | AIが検索や査読をサポートし、特許調査と分析をノンストップで実行する。3種類の検索パターンとビジュアル分析機能を備える <sup>29</sup> 。                                  | 月額約1万円から <sup>30</sup> 。    | コスト重視で小規模チームでも導入しやすい。ビッグデータ可視化に強く、戦略的分析に適したプラットフォーム <sup>31</sup> 。 |
| Shareresearch<br>(日立システムズ) | 日立が開発したクラウド型サービス。国内外の特許を一つのインターフェースで検索し、日立のデータセンターで公報データを管理。企業ごとにカスタマイズ可能 <sup>32</sup> 。                    | 価格は非公開。                     | 大企業向け。既存システムに組み込むことでIT部門と知財部門の連携が容易。                                |
| PatentSQUARE               | 100カ国以上の特許文献を串刺し検索し、同義語辞書や翻訳辞書を利用した高精度検索を提供 <sup>33</sup> 。レポート生成や特許マップ機能が充実。                                | 月額数万円から。                    | 国際特許検索や多言語翻訳が必要な企業。   |
| AI Samurai ONE             | AIが類似文献を自動抽出し、要約や出願前調査を数日で実行。要約とマップ表示で検討が容易 <sup>34</sup> 。  | 価格は個別見積。                    | スタートアップ・中小企業が出願前調査を迅速に行いたい場合に向く。                                    |

## Aconnectとの比較:

- ・**機能範囲** - Aconnectは技術探索と特許調査の両方をカバーし、ニュースや論文・市場情報の収集と共に機能も備える。競合ツールは特許調査に特化したものが多く、技術探索やニュースの網羅的な収集・要約機能は限定的である。
- ・**インターフェースと共有** - AconnectのロジックツリーUIやコミュニティ機能は、非専門家でも情報を視覚的に理解し共有できる点で優れている。THE調査力AIもマトリクス表示で共有を支援するが、主に知財専門家向け。
- ・**価格帯** - 特許調査ツールの多くは月額数万円から数十万円。Aconnectの価格は公開されていないが、機能が多岐にわたることから中～大企業向けの料金設定が想定される。
- ・**ターゲット層** - Aconnectは製造業のR&Dや知財部門を中心とした全社導入を想定しており、ニュース・市場情報・社内資料を一元管理したい企業に適する。競合ツールは知財部門や特許事務所など特許調査に特化したプロフェッショナルを主対象とすることが多い。

## 7. 市場の反響と第三者評価

- ・**プレスリリースによる注目** - 新機能の発表は国内のニュースサイトやAI関連メディアで取り上げられ、「技術者の専門業務を支援し調査工数を削減する」と紹介された。Generativeのニュース記事では、技術探索エージェントが論文やニュースから課題解決のアイデアを提示し、特許調査エージェントが開発予定技術の関連特許を自動抽出することを報じている<sup>35</sup>。記事はユーザーから特許関連性調査の自動化や作業負担の軽減に期待する声があると伝えている<sup>36</sup>。
- ・**利用事例の増加** - Aconnectは2025年7月のリブランディング以降、製造業各社や教育機関で導入が進んでいる。レゾナック（旧昭和電工）では幅広い領域の技術情報を迅速に把握し、新規テーマ検討に活用していると述べ、AIによる要約生成が役立っているという<sup>37</sup>。神田外語大学ではAconnectを授業で活用し、収集した記事を起点に学生間の議論が活性化したとの報告がある<sup>38</sup>。これら事例は情報共有と発想の広がりに貢献していることを示す。
- ・**ITreview等のユーザーレビュー** - 調査時点ではAconnectのユーザーレビューは少ないが、今後新機能によってR&D部門や知財部門の評価が高まり、市場での認知度が向上すると考えられる。

## 8. 今後の展望と課題

### 8.1 製造業におけるAIエージェント活用のトレンド

- ・**AIによる専門業務の自動化** - 研究開発や知財調査など、従来は専門家が担っていた業務をAIが代替・補助する流れが加速している。生成AIの進化により、論文・特許・ニュースの理解や比較、アウトプット生成が実務レベルに到達しつつある<sup>39</sup>。国際的にはDeep Research型エージェントなどが登場し、市場や技術調査を自動化する競争が激化している。
- ・**データガバナンスと信頼性の確保** - AIエージェントは大量の外部データを処理するため、データの品質や偏りの管理が重要となる。StockmarkはISO/IEC 27701認証を取得しプライバシー保護に取り組んでいる<sup>40</sup>。今後は特許評価の責任範囲や知的財産侵害の判断におけるAIの役割が社会的に議論されるだろう。
- ・**マルチモーダル化とLLMの高度化** - ストックマークは独自の日本語特化LLMを開発しており<sup>41</sup>、今後は画像や図表を含む特許・論文を理解するマルチモーダルAIの開発が期待される。技術探索エージェントが動画や画像データからも知識を抽出できるようになれば、ユーザー体験はさらに向上する。

- ・**業界間連携とエコシステム** - Aconnectはニュース・論文・特許を統合して情報を提供するプラットフォームである。今後は部品サプライヤーや顧客企業とのデータ連携、他社のAIツールとの相互運用などエコシステムを拡大することで、研究開発プロセス全体をAIが伴走する世界が近づく。

## 8.2 取り組むべき課題

- ・**精度と透明性の向上** - 技術探索・特許調査エージェントが提供する仮説やマッチング結果の妥当性をユーザーが検証できる仕組みが求められる。AIが生成した仮説の根拠を明示し、ブラックボックス化を防ぐことが信頼性向上の鍵となる。
- ・**専門家との協働** - AIエージェントは専門家の判断を補佐するツールであり、完全な自動化は現実的ではない。特許侵害の判断などは弁理士の判断が必要であり、AIと人間が役割を分担するガイドライン整備が求められる<sup>16</sup>。
- ・**ユーザー教育と文化変革** - 新しいツールを導入しても使いこなせなければ価値は生まれない。AIツールの習熟と情報共有文化の醸成が重要であり、教育機関や企業が積極的にAIリテラシーを向上させる必要がある<sup>42</sup>。

## 9. 結論

ストックマークの『Aconnect』に新たに搭載された技術探索エージェントと特許調査エージェントは、製造業の研究開発および知財調査の現場で直面する情報量過多・属人化・調査時間の長さといった課題に応える革新的な機能である。技術探索エージェントは課題定義から解決策の提示までを自動化し、最大50のアプローチと関連文献を提供することで研究者の発想を広げる<sup>13</sup>。特許調査エージェントは開発テーマの構成要素を自動抽出し、特許との一致度を判定することで先行技術調査を大幅に効率化する<sup>16</sup>。

これらの新機能は、従来の情報収集ツールを超え、研究開発プロセスの初期段階から知財リスク評価までをAIが伴走する世界を示している。競合ツールに比べて、Aconnectはニュース・論文・特許・社内資料を統合し、R&Dと知財部門の連携を促進する点で優位性がある。今後はAIエージェントの精度向上、透明性確保、ユーザー教育が課題となるが、製造業の技術革新と競争力強化に大きく貢献することが期待される。

<sup>1</sup> 製造業特化のAIエージェント機能で工数削減 / 属人化解消を実現 専門業務を自動化する「技術探索/特許調査エージェント」を『Aconnect』に新搭載 | ストックマーク株式会社  
<https://stockmark.co.jp/news/20251030>

<sup>2</sup> Company | ストックマーク株式会社  
<https://stockmark.co.jp/company>

<sup>3</sup> <sup>4</sup> 製造業向けAIエージェントAconnect（エーコネクト） | ストックマーク株式会社  
<https://aconnect.stockmark.co.jp>

<sup>5</sup> <sup>8</sup> 技術探索・トレンド把握・社内連携まで。競争優位性を向上させる技術開発を実現 | 製造業向けAIエージェント「Aconnect」 | 製造業向けAIエージェントAconnect（エーコネクト） | ストックマーク株式会社  
<https://aconnect.stockmark.co.jp/scene/design/>

<sup>6</sup> <sup>9</sup> <sup>10</sup> <sup>20</sup> <sup>37</sup> <sup>42</sup> 幅広い事業領域の情報を素早くつかみ、研究テーマの検討が増加 | 導入事例 | 製造業向けAIエージェントAconnect（エーコネクト） | ストックマーク株式会社  
<https://aconnect.stockmark.co.jp/cases/resonac/>

7 26 他部門連携からIPランドスケープまで。散在する情報を知財戦略に変える | 製造業向けAIエージェント「Aconnect」 | 製造業向けAIエージェントAconnect（エーコネクト） | ストックマーク株式会社  
<https://aconnect.stockmark.co.jp/scene/ip-strategy/>

11 12 13 14 Aconnectエージェント\_技術探索エージェント - Aconnectサポート

<https://anews-stockmark.zendesk.com/hc/ja/articles/51765979956889->

Aconnect%E3%82%A8%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%83%B3%E3%83%88-

%E6%8A%80%E8%A1%93%E6%8E%A2%E7%B4%A2%E3%82%A8%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%83%B3%E3%83%88

15 16 Aconnectエージェント\_特許調査エージェント - Aconnectサポート

<https://anews-stockmark.zendesk.com/hc/ia/articles/51389428718617->

Aconnect%3%82%A8%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%83%BC%E3%83%88-

%E7%89%B9%E8%A8%B1%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E3%82%A8%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%83%B3%E3%83%88

競合に先手を打つ戦略的調査について徹底解説 - エムニ

<https://media.emuniiinc.jp/2025/06/29/technology-trend-survey/>

18 19 23 39 AI活用で特許調査はここまで進化する！品質・速度を異次元に - エムニ

<https://media.emuniiinc.jp/2025/07/25/>

27 28 29 30 31 32 33 34 特許調査システムを徹底比較！導入事例や費用・料金、口コミ評判も踏まえた  
おすすめを紹介 - 集客・広告戦略メディア「キャククル」

<https://www.shopowner-support.net/hr/personnel-recruitment/manufacturing-industry/patent-search-system/>

35 36 ノックマークAI新機能追加発表

<https://www.generative.com/news/stockmark-ai-new-function-addition-announcement>

<sup>38</sup> 神田外語大学、ストックマークのAIアシジエント「Aconnect」を全学へ導入

[https://aismiley.co.in/ai\\_news/kanda-stockmark-ai/](https://aismiley.co.in/ai_news/kanda-stockmark-ai/)

40 41 Stockmark Inc | AIでチームの潜在能力を掘り起こす

<https://stockmark.co.in/>